国史跡「馬高・三十稲場遺跡」の追加指定について

資料№3-1

１．概要

　平成29年６月16日に国史跡「馬高・三十稲場遺跡」について、文化庁文化審議会文化財分科会から文部科学大臣に追加指定の答申がありました。追加指定地の範囲については下記及び別紙のとおりです。

既指定面積 ４５，７０４．５４㎡ （所有　長岡市）

追加指定面積 １５，２８７．７９㎡ （所有　民地、長岡市）

合計面積 ６０，９９２．３３㎡

２．馬高・三十稲場遺跡について

　馬高・三十稲場遺跡は、縄文時代中期の馬高遺跡と後期の三十稲場遺跡の２つの大集落からなる史跡です。

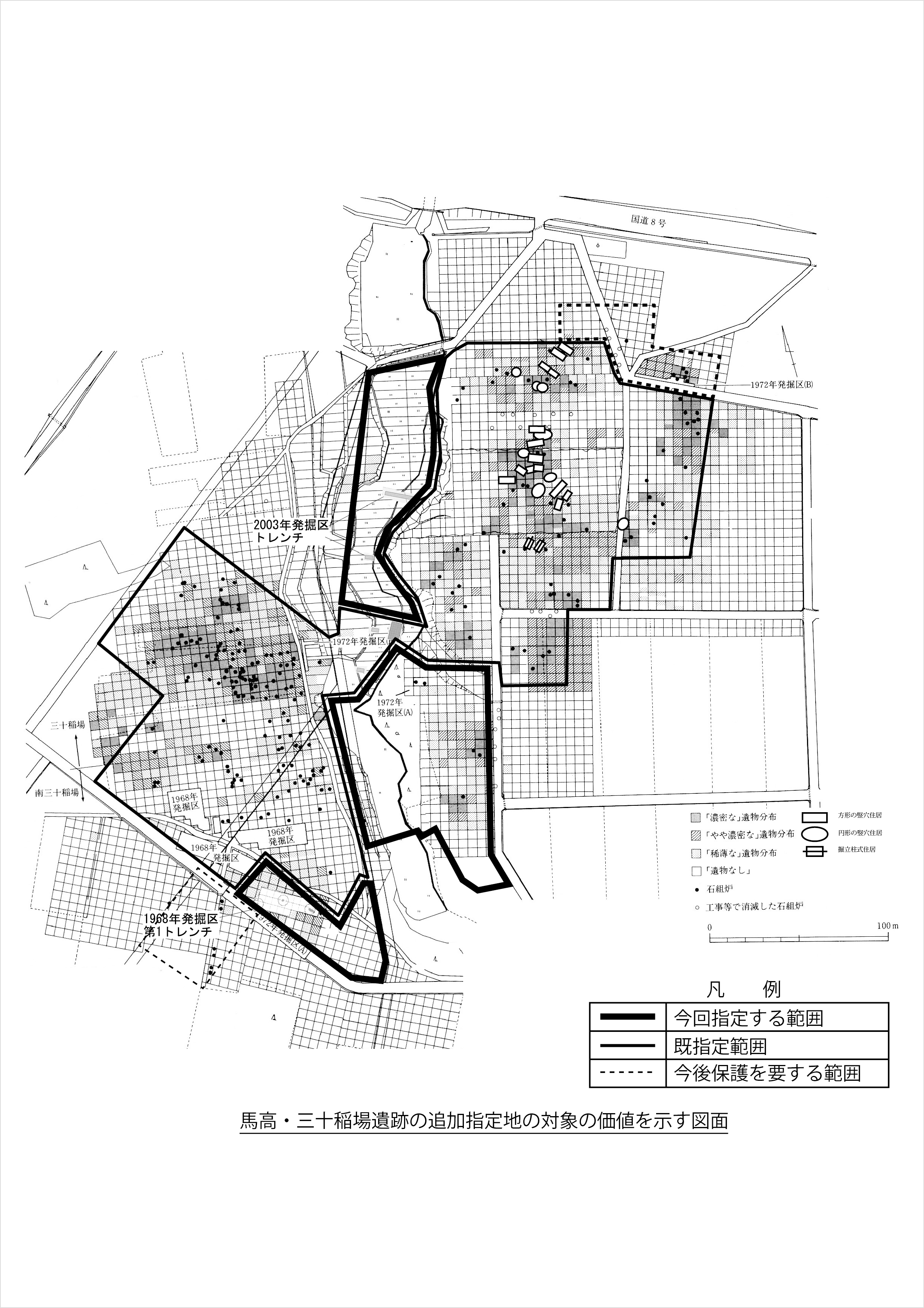
　明治30年頃から遺物の採集がはじまり、特に地元の素封家 近藤家により積極的な表採が行われ、昭和10年から16年にかけては近藤篤三郎による発掘調査が行われるなど、多くの貴重な遺物が収集されています。これらの成果のうち馬高遺跡については中村孝三郎により『馬高No.1』（1958年 長岡市立科学博物館刊）としてまとめられています。

　馬高遺跡は、火焔型土器の最初の発見となる「火焔土器」出土の遺跡であり、多数の土偶やヒスイ大珠等の出土から周辺地域の中核的な集落の１つと考えられています。

　三十稲場遺跡は、縄文時代後期の集落で、縄文土器の中でも珍しい蓋を持つ土器型式である「三十稲場式土器」や関東地方との関係が指摘される「南三十稲場式土器」の標識遺跡であり、筋砥石や垂玉・小玉の出土から玉つくりの集落と考えられています。

　ごく近い場所に縄文時代中期～後期にかけて大集落が形成されており、研究史的にも貴重な遺跡であることから昭和54年に国指定史跡となっています。この時の指定では、遺物や遺構が集中している中心地を指定していました。

　今回の追加指定地については、昭和43年以降の調査において数基の住居に伴う炉跡が発見されているほか、ボーリング調査で住居の存在が推定されている場所を中心にこの後の保存・活用を考慮して文化庁と協議を重ね、追加指定を申請しました。今後、追加指定地ではさらなる調査等を行い、保存・活用のために「馬高・三十稲場遺跡整備活用委員会」で協議を行い、史跡整備を行う計画です。



資料№3-2

遠藤沢